第７章

「家で死ぬ」

医療と介護のあり方

7-1.　それぞれの死に方
7-2.　家で死ぬ

7-1. それぞれの死に方

1. わたしはバイ菌じゃない！といった老女

末期の肝硬変で入院していた老女。入院中はMRSA（抗生物質が効かない細菌）が（+）だったため個室に隔離されていました。部屋に入るのには白衣を着て帽子、手袋着用。その方がしょうわに転所してきました。

介護施設は抵抗力のある方が利用しているのでMRSA（＋）は隔離不要で、他の利用者さんとの交流も普通にできます。腹水が溜まったので病院に行くか確認したところ、本人は「私はバイ菌じゃない」と言って、隔離されることを嫌がり施設で看取ることになりました。

さてこの老女、ひとが大好きなんです。そして酒も大好きなんです。「一杯飲むかい」と聞くと「飲みたい」と即答。それからなくなるまで毎晩スタッフと利用者で老女を囲んで宴会をしました。スタッフのひとりから「いつまでやるんですか」と聞かれまして、当然「死ぬまで」と。三晩続きました。

2. 大腸がん末期の男性。

確か60代でした。奥さんがクリニック開設からの患者さんでした。奥さんの診察は途中からご主人の病気の相談になりました。男性の病状について担当医から説明されてもよくわからないからと、わたしの診察に来てどういうことなのかと毎回質問されて、わたしが奥さんの疑問を紙に書いて、男性の次の診察に持たせ手主治医に確認する作業を何度か繰り返しました。

そのうち容態が悪くなり、都内まで通院することも難しくなったので、わたしがいつもお世話になっている近場の病院の先生に主治医をお願いしました。

亡くなる1か月前にイレウス（腸閉塞）で入院。退院するときには5分粥食しか食べてはいけないと指導されてきました。

そうそう、当時私は頭を筋色に染めていたのですが、その男性が、家に帰る前に自分も「髪を染めたい」というので、しょうわに途中下車して毛染めと入浴をしていきました。ちょうど家に着いた頃にわたしも往診に行きました。

「何が食べたい」と聞くと「ひれ酒が食べたい」と。「どうせ死ぬんだから」何を食べても大丈夫と奥さんに言って、さっそくショウワ御用達のお寿司屋さんに電話して握りとフグひれを用意してもらいました。男性はすしを食べられなかったのですが、ひれ酒は飲んだそうです。そのあと外科の先生にばれてしまったのですが、「そうだよね」と言ってもらいました。

次に往診した時、家に帰って、家族の顔を見ながら過ごすことをとても喜んでいました。

せっかくだから、車いすへの乗り移りの方法を家族に教えてかえりました。

次に往診に行った時には、昔夫婦でよく行った浦和のウナギ屋さんからうな重を取り寄せて、リビングで車イスの本人を囲んで食べたそうです。この時には「みんなの顔を見ながら食事ができてよかった」と言っていました。

12 月 31 日に往診した時は「年が越せそうだ」と。1 月 1 日は日本酒で信念と、年が越せたことに乾杯しました。（どうやって帰ったかはご想像にお任せします）亡くなる前日は風呂に入る約束をした日でしたが、呼吸状態がかなり悪く、しょうわまで送迎することは難しい状態でした。でも本人は「風呂に入りたい」と希望したので、自宅の風呂に入れることにしました。酸素マスクを着けながら、職員が抱えて一緒に浴槽に入りました。苦しい中でもいい笑顔でした。

次の日の午前 2 時に亡くなりました。外科の先生も往診に来てくれて、わたしが死亡診断書を書いている間に、先生も加わって最後の清拭をしました。先生曰く「始めてやった」そうです。

3. 警備員のじいさん

そのじいさんは昼過ぎに施設から逃亡しました。幸手の方まで行き、たまたま千円を持っていてパン屋であんパンと牛乳を買って食べ、そのあとタクシーを呼んでもらって帰路につきました。住所が言えたので自宅の手前までは行けました。けれどカーナビなどない時代のこと、最後の交差点で反対方向を指示してしまい 2 時間タクシーで自宅探しをしました。無事に帰宅したのが確か午後 8 時過ぎでした。
そのじいさんのその後。受付の中で毎日警備員として働くようになりました。「ここから出て行くやつを監視する」と言って、毎日朝から受付に座るようになりました。

ショートステイは夜勤。デイケアは日勤として勤務表を作成したら、7 日間の夜勤を見て「こんな所じゃ働けない」と立腹していました。

じいさんは老衰で亡くなりました。自宅で穏やかに。大好きだった日本酒を死に水にして家族と一緒に乾杯しました。

4. 炉端焼き屋のおばちゃん

しょうわの開設準備をしている頃に、暖簾に行灯。杉玉の下がった炉端焼き屋さんを見つけました。一目で「高そう」とわかる店構えでしたが、毎日頑張っている自分へのご褒美としてその店に入ってみました。

そこからおばちゃんとの付き合いが始まりました。

クリニックが終わると寄って。しょうわの仕事が終わると飲みに行って。しょうわの職員と飲んで。しょっちゅう通っていました。

飲んでいると必ずおばちゃんが隣に来てくれて、「あたしも飲んじゃおうかな」と。どんだけおごったかな。数えきれないくらい一緒に付き合ってもらって、愚痴を聞いてもらって。

おばちゃんが肝臓がんになりました。それでも一緒に飲んで。「死ぬときは看取らせて」と約束しながらビールを飲んで。

亡くなる1週間前までお店に立っていました。

その後入院した。終末期で。

面会に行ったら、4人部屋の廊下側。夜だったこともあるけど、カーテンが締まり薄暗く、狭い病室。

「おばちゃん家に帰ろう」

その後息子と相談して、しょうわに1泊。そしてすぐに自宅。

「何かあったらどうするんですか」って、これから何かあるとしたら死ぬことくらい。

「あーそうか」と家族も納得して自宅に。

亡くなる日に、おばちゃんもよく言っていた焼き鳥屋でくしを焼いてもらって、一緒に食べようかなと思いながら往診に向かうと、「呼吸していない」と連絡があり、急いで焼き鳥を買って自宅へ。おばちゃんはベッドの上。家族は隣の部屋で宴会の準備。そうです。わたしが息子に言ったんです。みんなでワイワイやろうって。

中学生の孫も加わっての清拭、はじめは近寄ることが怖かった孫たちも最後は笑って死に化粧。親戚、家族一同おばちゃんを囲んで記念撮影。

そしてそのあとは宴会に突入。死は悲しいだけのものではありません。笑って受け入れることもともできるのです。

おばちゃんらしい最期でした。

5. 和尚

和尚は40代からアル中でした。50代になって糖尿病になりました。いつ頃からか物忘れもみられていました。

60代半ばに出会いました。大声を出す、勝手に出歩くために病院から強制退院させられ、しょうわに来ました。確かに声がでかい。よく通る声で、そうです和尚ですから。

しょうわに入所してから、夜中に冷蔵庫を開けて大きなタッパーひとつ分のゼリーを食べてしまう。毎晩食べてしまう。昼間は「タバコちょうだーい」と渡すまで大声で要求するのが常。当然血糖値はなかなか安定しません。運動療法は喫煙所まで歩行器を使って何度も往復するので何とかなりますが、食事療法は全く聞く耳を持ちません。結局夜のゼリーも含めてすきに食べた状態で薬物コントロールをしていくことにしました。そうそう、それまでインスリンの注射もしていましたが、し

ょうわを退所したらインスリンは打たせないと確信できたので、内服薬でコントロールすることにしました。

どうにかこうにか血糖値は安定しましたが、

退所した後は、予想通り、デイケアに通うことを拒否しました。本堂のお供えのお菓子を食べてゴロゴロという生活に入ります。仕方ないのでまた入所。何度か繰り返すうちにようやく通うことも拒否はなくなりました。

けれど今度は血糖値が上昇して。家族は血糖コントロールのための入院を希望するので紹介しますが、すぐにトラブルを起こして戻ってきます。何度目かの入院でようやく家族には、和尚の認知症を理解してもらって、以降は私が主治医となりました。

夜中の間食（介護の世界ではこれを盗食と言います）はとても大切です。夜中間食することを前提に薬を調整しているので、食べてくれないと血糖値が乱れます。食べない日が続くと低血糖状態になるので勧めて食べてもらうこともありました。このような状態でおよそ5年。ついに腎機能低下が進行してきました。通常は透析となるのですが、和尚の状態ではおそらく拘束しなければ透析を行なえない。本人は透析をしなければならないことを理解できないし、今までのことを考えると本人には苦痛以外の何物でもないと考えました。家族と話し合い透析は行わないこととしました。そして相変わらず食べ放題、飲み放題、タバコ吸い放題という生活を送り、亡くなりました。

「すいませーン。タバコくださーい」功徳のつもりで何本も和尚にタバコを差し上げました。1度だけ般若心経をお唱えいただきました。いい声でした。